報告集

伝えきれない ありがとう

NPO法人こそだてシップのあゆみ

～育む力の復興を求めて～

NPO法人こそだてシップ 2018.6.15

表紙はこそだてシップのロゴマークです

報告集

伝えきれない ありがとう

NPO 法人こそだてシップのあゆみ

～育む力の復興を求めて～

全てが終わってしまったかのように思われた「時」。
しかし、その「時」から全てが始まっていた。

2018.6.15－ＮＰＯ法人こそだてシップ発行

平成23年（2011年）3月11日大船渡中心部
東海新報社（鎮魂3.11）より

報告集の発行に寄せて

感謝と報告

NPO法人こそだてシップ代表理事
伊藤　怜子

東日本大震災から七年が経ち、当法人の活動報告集が発刊出来ますことに、深い感慨を覚えます。

平成二十年、地元助産師有志で始めたささやかな地域の子育て支援が、あの未曽有の東日本大震災から、皆様のお力で今日まで活動が継続出来ましたこと、心から感謝申し上げます。

千年に一度といわれる大震災は、今でも、この先も、到底言葉で語りつくすことのできない悲劇と哀しみを残しました。しかし、被災地の劣悪な環境でも赤ちゃんが産まれ、その小さな命の赤ちゃん達の笑顔と安らかな寝顔は、被災地に住む私たちを和ませ、明るい灯のように支えてくれました。

このような中で当法人が、壊滅した街で困難な育児を続けている方々や、不安だらけの妊婦さん方の声を拾い、身近に寄り添うことが出来ましたのは、ひとえに、当法人活動を支えて頂いた、皆様方お一人お一人の尊いお気持ちのお蔭です。

直接お礼を申し上げる機会も少なく、叶わず、お母さんたちの笑顔が徐々に大きくなってきている今、これまでの活動のご報告と、皆様方のご支援に感謝をこめて、この「伝えきれない　ありがとう」を発刊させて頂きます。

何卒ご一読頂き、今後とも当法人の活動にお力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

平成三十年三月

寄稿

回想・十年前の小春日和の日に

（一社）岩手県助産師会理事
金野みか子

「ＮＰＯ法人こそだてシップ」発足五周年を迎えられ、活動報告集を発行されますことを心よりお祝い申し上げます。

思い起こしてみますと、今から十年前平成二十年の小春日和の日でした。貴法人代表伊藤怜子さん宅で、時も忘れるほど赤ちゃんの子育てについて熱く議論し合い、帰り際に見たパノラマ窓からの大船渡湾の美しさが今も忘れられません。助産師としての思いを、これほど熱く語った日はなかったからでした。あの時、助産師として何か役に立つのならと、私なりにゆっくりやって行こうと決めた日でもありました。

それからは、伊藤宅で、時には金野宅で、助産師業務従事者届け、開業助産師の手続き、日本助産師会の加入、気仙地域の助産師仲間の会づくりなど、事務的な作業の傍ら、市役所などからの随時依頼の母子相談指導を二人でこなすという一年間でした。

平成二十二年三月に岩手県長寿社会振興財団「いわて子ども基金」により、助産師会岩手県支部共催のもと、「母乳で元気！」と題して県立大船渡病院副院長の小笠原敏浩先生による講演会を、ＹＳセンターで開催できたことは、今後の活動に向けて、一つのステップになったと思っています。

平成二十二年六月一日、助産師仲間四名（伊藤怜子、大上静枝、門口和子、金野みか子）で、出張助産師の会「母子サポート」が開設されました。気仙、釜石管内の行政からの依頼はもとより、ＹＳセンターやショッピングセンターサンリア赤ちゃんの部屋などの会場で、会としての母子相談指導が進められていきました。

そうした中、平成二十三年三月東日本大震災を受け、私も被災者となり、出張助産師の会の活動を続けることが困難になりました。伊藤さんはじめ、会の仲間にご迷惑をおかけした上、生活物資を届けていただくなど、いろいろな面で支えていただきました。被災後は会の活動も一変し、伊藤さんを中心に母子の復興支援を勢力的に進められ、平成二十三年九月には「ママ＆ベビーサロン大船渡、陸前高田」が開設されました。平成二十五年五月には「ＮＰＯ法人こそだてシップ」としての認証を受けられました。そこまでのご努力ご活躍に敬服いたします。

このたびの五周年を迎えるにあたり、発足前の活動も何らかの道筋につながっているとの、伊藤代表の言葉を受けて寄稿に至りました。今後も「ＮＰＯ法人こそだてシップ」が、地域の母子支援活動としてますます発展されますことを心から願っております。

報告集

『伝えきれない　ありがとう』

こそだてシップのあゆみ　～育む力の復興を求めて～

報告集の発行に寄せて　NPO法人こそだてシップ代表理事　伊藤　怜子

感謝と報告　金野みか子

寄稿　回想・十年前の小春日和の日に

第一章　伝えきれない　ありがとう

出張助産師の会の「母子サポート」から「すくすくルーム」まで　伊藤　怜子　2

「こそだてシップ」のあゆみ

第二章　東日本大震災をへて

特別寄稿〔1〕　ラモナ　バイマ　10

こそだてシップの支援

東日本大震災のサポートを振り返って　宗　祥子　12

こそだてシップの支援活動

沿岸被災地支援の思い出　桑原　慎一　18

岩手沿岸母子支援の思い出　及川智恵子　19

巡回訪問の思い出（赤ちゃん訪問）　渡邊　寛子　20

座談会「赤ちゃん訪問」平成二十八年七月二十三日　於　千葉県流山市　22

体験談・ママと助産師の被災体験

・Mさんの場合（聞き取り・渡邊寛子） 28
・Aさんの場合（聞き取り・渡邊寛子） 28
助産師ママの被災体験　吉田　百 30
陸前高田市・被災地の助産師　大上　静枝（聞き取り・伊藤） 33
避難所のボランティア体験記　伊藤　怜子 35
避難所の仮設新生児室にて　伊藤　怜子 38
被災地のママ達の声 40
「ママサロン」・「赤ちゃん訪問」から 41
被災地支援ボランティアの声
カメリアホール・米崎コミセン
特別寄稿〔2〕
症例報告・「被災地岩手における舌・喉頭矯正手術（CGL）」症例　山本　正子 47

第三章「すくすくルーム」のいま
恩送り～支援される側から支援する側へ～　板林　恵 52
笑顔がいっぱい「すくすくルーム」　大村　恵世 54
寄稿　「シップ号」の窓から　～震災から五年の感慨～　伊藤四士良 55

資料編 60
あとがき

平成23年（2011年）7月28日瓦礫と雑草の中の大型客船「飛鳥Ⅱ」
東海新報社（鎮魂3.11）より

第１章

伝えきれない ありがとう

1. 出張助産師の会の「母子サポート」から
「すくすくルーム」まで

「こそだてシップ」のあゆみ

代表　伊藤　怜子

母子サポートのこと

東日本大震災によって壊滅的な被害を受けた大船渡市、陸前高田市は、震災前から慢性的な医師不足の岩手県の中でも、当地域は特に深刻な地域。お産施設は一カ所のみで、この病院には釜石、遠野、住田を含む近隣四市一町から分娩が集中し、地域には、お産の出来る開業医院も助産院もありません。このような環境で、「退職したら、資格を生かそうねー」と行政職員の助産師仲間金野みか子さんとため息まじりに、熱く語り合っていました。

平成二十年、早期退職の金野さんと、県立病院を定年退職した伊藤は、大船渡市保健センターの業務委託で地域デビュウー。平成二十一年、フリーの助産師仲間が四人になり「出張助産師の会母子サポート」を開設しました。しかし、金野さんを除くメンバーは、地域活動が全くの初体験者。地域を知り尽くしている彼女の指南を受けつつ、保健センターの「パパママ教室」講師や母子相談員などを介して、地元に馴染む活動を進めました。

平成二十二年団体独自の活動開始。まず、岩手県立大船渡病院副医院長小笠原敏浩先生のご講演と「母乳育児ママの体験」発表の「おっぱい大すき！」講演会を開催。そして大船渡市内に「ＹＳセンター母子相談室」を日本助産師会岩手県支部県南地区と共催開設。月一回の相談室では、母乳相談、沐浴指導、赤ちゃんのお世話、新生児用品の展示、「赤ちゃんのいる暮らし」体験イベントなど実施。広い和室でゆったりと母子に向き合う時間は、職場を離れた私たちにとって、大好きな赤ちゃんやママ達の笑顔に出会える、助産師冥利に尽きるひと時でした。任意団体として、徐々にまちの中での活動も板につき、地元紙でも報道されるようになった頃、あの東日本大震災発生です。

母子相談室「にこにこ」のこと（大震災直後）

大震災四日目、初めて高台からまちを見ることができました。メチャクチャに破壊され、人の気配もなくなった不気味な街に唖然。立ちすくんでいるうちに突然、数日前、育児相談室に来ていた赤ちゃんたちが浮かびました。「アノお母さんたち、赤ちゃんたち、一体何処に、どうなって…」と、いつの間にか頭がすっかり助産師モードになったその日でした。

「何とかしなくちゃ」と思うもの、避難所のボランティアで動けず、母子サポートのメンバーに呼び掛けたのは四月下旬頃。自宅流出の一人を除き、被災しても比較的元気な？他のメンバー達と、五月に無償提供の商業施設五・五坪スペースに、月二回の育児相談室「にこにこ」を開設。

弱体した地元助産師の応援に、助産師会会員の数人が内陸から駆けつけました。が、壊滅し

ママたちの悩み　育児相談・サロン開設
3・11　その日、そして

朝日新聞 2016.4.5（火）

平成23年 母子相談室「にこにこ」内部（サンリア内）

た悪路では車の往復も危うく時間もかかり、残念にも中断。地元仲間は被災し様々な事情を負いながらも、短時間でも参加、八十歳を過ぎていた大先輩にも声掛けして応援頂きました。

相談室には、精神的、肉体的、経済的に困難になった育児中の母親や家族が来訪したので、今の生活でも「可能な」育児指導や沐浴指導、母乳相談そして知りうる支援やサービスの情報提供、育児用品の物資の配布など実施。交通も遮断され、情報も伝わらない中、六ヶ月間で延べ一二九名の方が来訪。

被災地の母子「駆け込み寺」的になった相談室「にこにこ」には、次第に地元の困窮した子育て情報も伝わってきましたが、公的機関は何処も復旧中で繋げず、支援の限界を痛感させられる日々でした。しかし、この相談室を被災地のまちの中に開設したことで、当団体の活動が県内外のボランティアや支援団体に伝わり、この後の母子支援が広く展開されることとなりました。平成二十三年十二月「ママサロン開設」で休止。

ママサロンのこと

育児相談室「にこにこ」を開設して間もなく、被災地支援団体「ＰＣＡＴ」の助産師渡邊寛子さんが相談室を訪れました。「被災して、困っているお母さん達の為に、ママサロンを開きませんか?」と。「相談室」開設だけでとても余力のない私たち、「無理です」とその場で辞退。しかし、彼女は諦めませんでした。数日後に又、「東京で被災地を応援している団体があります。是非上京して欲しい」とそれは熱心に口説かれ、つい断りきれずに平成二十三年九月、大上助産師と二人で上京しました。

その会でとにかく驚いたのは、被災地を応援しようと集まった沢山の、様々な職種の方々の熱気！乳児や幼児連れの方々もおりました。私たち二人は、伝える準備も資料もなく、ただ現地の状況を話すだけでしたが、途中から胸が詰まり何を話したのか…覚えておりません。

帰途の新幹線車中で、大上助産師がボソッと、「あんな見も知らない、縁もゆかりもない人たちが、あんなに応援してくれて…、やって（サロンを）みっか?」と。伊藤も即決でした。

地元仲間の誰ひとり「ママサロン」なる体験もなく、見た事もなく、が、悩んでいる暇もなく、一か月間の準備で「ママ＆ベビーサロン大船渡・陸前高田」を開設。渡邊さんはじめ、被災地の母子を応援しようと設立した東京都助産師会

第１回カメリアホール「ママサロン」（平成23年10月５日）

「東京里帰りプロジェクト」（代表：松が丘助産院院長宗祥子氏）の強い後押しのお蔭です。サロンのネーミングを始めとして、一切の面倒がなく、敏速な助産師派遣と資金援助を受け、疲弊しきった現地の活動も息を吹き返しました。当時はこの「敏速」な支援力が何にも勝りました。支えて頂くことで次の活動エネルギーへと繋がりました。

平成二十三年十月五日、大船渡市内の第一回「ママサロン」当日のことは、今でも忘れられません。当時、まちの中で余り母子の姿を見ることもなく、開催しても果たして…。ところが何と、三十四組もの母子が集まりました。大震災で音信不通になっていた、ママ友や知人が再会して抱き合って、「良かった―会えて！」「○○さんと連絡がとれない」「パパが流されてしまった」「婆ちゃんがまだ見つからない」等の会話が飛び交い、激変した境遇の語り会いの場になって、準備したプログラムも吹きとび、四人のスタッフは、耳にする会話にもらい泣きしながらテンテコ舞いの「ママサロン」の初日になりました。

「ママサロン」はそれから毎月二回、大船渡市と陸前高田市で継続開催し、時には六十組の母子参加！毎回の悩みは、復旧最中の街で使用できる会場の確保とスタッフ確保。無料、軽食付き、予約なしの「ママサロン」継続運営費は、被災地支援団体の応募書類と格闘しつつ、助成を受けることができました。

「ママサロン」開催へ、全国から足を運んでくれたボランティア皆様のご支援は、とても語りつくせぬほど多彩で温かく、ママ達はどんなに励まされたことでしょう。「抱っこボランティア」の赤ちゃんのぬくもりを、まだ覚えている方もいらっしゃるかも知れません。地元の「大船渡西ロータリークラブ」様からの、豪華なクリスマスお弁当も、嬉しいプレゼントでした。

米崎コミセン「第１回ママサロン」平成23年10月

「ママサロン」継続活動の原動力は、何と言っても人と人との出会い。何時、どのような人と出会え、熱く語りあえるか…、助産師として共感しあえること多く、本当に幸運でした。身体の空く隙がないほど引っ張りだこな地元の助産師仲間は、折々顔をだして「ママサロン」を気遣い応援し続けました。

平成二十八年九月、陸前高田市内の「ママサロン」継続に向けて、同市長に「子育て支援の要望書」を提出しましたが、回答を得ることなく翌年三月、陸前高田市内「ママサロン」は、五年五ヶ月で終了するに至りました。

大船渡市内開催の「ママサロンこそだてシップ」は、妊婦さんから一歳までの乳児対象（住所にこだわらない）集合サロンとして、毎月二回盛況に継続しております。「助産師が駐在し、日頃の育児からホット一息ついて、ママ達が元気になる場所」として誕生から八年目を迎えました。元気な赤ちゃんとママ達の笑顔に出会う度、「開いてきていて良かった！」と思います。

巡回「赤ちゃん訪問」について

「ママサロン」開設直後から、被災地域に散在やする母子や、避難所の子育ての苦境は予想しつつも、当時は「サロン」開催だけで精一杯。そのような中、平成二十三年十一月陸前高田の「ママサロン」開催中に、謀避難所から助産師

の要請を受けました。「此処に赤ちゃんを抱えたお母さん達が四組、五組いる。来て頂けないか？」と。余裕のないサロンから陸前高田市の大上助産師、「俺、いってくっから」と貴重なガソリンの自家用車で出向きました。彼女の情報や、その後も続いた要請から、「今、本当に支援が必要なお母さんたちには、此方から出向かない限り支援出来ない」と、スタッフ間の確信が深まりました。

幸い被災地支援団体からの助成が得られ、平成二十四年五月本格的に巡回「赤ちゃん訪問」を開始。問題は助産師不足。ここでも宗代表の「東北被災地母子支援、一般社団法人ジュスペール」が、東京から助産師を派遣し、県内助産師とチーム編成で巡回活動が可能になりました。

「巡回赤ちゃん訪問」シップ号と（山本さん・渡邊さん）

「赤ちゃん訪問」は毎月二日間を二回（活動後半は一回）、助産師二名と運転手で、破壊し尽くされた市街地を「こそだてシップ号」で巡回。道路標識も地図もなく、震災前の風景を思い出しながら、訪問を要請された場所に辿り着き、あるいは、遮断された道路を迂回しながら母子や妊婦さんを探しまわりました。大震災後という非常時でも「個人情報守秘」の壁は厚く、災害弱者になっている妊婦や赤ちゃん情報は、何処からも一切得られず、自分たちの足と口コミが頼り。草の根的な活動で、もどかしい思いをしながらも、大船渡市、陸前高田市、住田町の九十三ヵ所の仮設団地は全て巡回。要請があれば何度でも訪問。被災者に限らず、地域の乳幼児母子にも活動を展開しました。やや閉鎖的な風土でも、災害で一変した地域の受け入れは、何のトラブルも無く、支援物資も大変喜んで頂きました。

訪問の最優先課題は、「母親の受容とメンタルサポート」。傾聴スキルの高いベテラン助産師が揃っていたので、「育児相談」のみならず、多様な「よろず相談」まで数多く対応。巡回メンバーは、訪問以外にも「ママサロン応援」「パパママ教室の講師」、「入院中の病児見守り」「障害児サポート」「哺乳力低下児の大船渡―東京間リレー支援」「行政懇談会」への出席など、いつも新幹線の時間ギリギリまで滞在して、被災地を離れました。

「巡回赤ちゃん訪問」（熊澤さん）

人材も、活動費も不安定のまま短期決戦のつもりでスタートした「赤ちゃん訪問」でしたが、平成二十五年五月、認証を受けて「ＮＰＯ法人こそだてシップ」を設立。被災地の育児を何とか支えたいという、応援助産師たちの熱い思いと、この活動に共鳴し、支え続けて頂いた被災地支援団体のお蔭で、巡回「赤ちゃん訪問」を三年三ヵ月間実施。「こそだてシップ号」走行距離二万五百Ｋ！

声なき育児困難者をも発掘し、精神的に追い詰められる前のサポートは、行政との連携なくしては推進出来ないことから、平成二十五年八

「仮設住宅団地」訪問　（山本さん）

月に大船渡市、陸前高田市に「育児支援要望書」の提言書を提出しました。

「赤ちゃん訪問」の原動力は、何と云っても被災直後から地元に入り、東京から汽車を乗り継ぎ、あるいはレンタカーで通い続けた渡邊助産師さん、山本助産師さんお二人でした。彼女たちの崇高な精神と行動力無くしては実現できず、継続できませんでした。お二人は、単身でも巡回訪問が出来るほど土地勘がついて、あの標識もない被災地を回られたのですから。そして、お二人と共に東京から駆けつけた助産師さん方、遠路から峠を越えてきた県内の助産師さん方、共に活動した地元の仲間達、「助産師は凄い！」と心底思うばかりです。育児環境が破壊された被災地では、居住地まで出向く「赤ちゃん訪問」が、「母子を安全に安心して守ることができ、支える最良の子育て支援」であったと今も確信しております。

大船渡市子育て支援センター「すくすくルーム」について

平成二十六年七月、「ママサロン」開設で休止していた子育て支援室を、「すくすくルーム」と名称を変え、以前の商業施設内に事務所も作り再開。自宅兼活動拠点から、狭いながら初めて団体らしい構えになって嬉しい再オープンでした。助産師、看護師、育児サポータ等が一人ずつ交代で常駐。しかし、市内唯一のショッピングセンター施設は、三十年ぶりの前館改装を控えておりました。

この時、「被災地の未来は子ども達、子供達の為にこの施設内に、支援室を造るようみんなで市に働きかけましょう！」と、日頃活動にご理解頂いている、市議会議員さん方からビックなアドバイス。実績を積んできた当法人の夢が、まさに実現する事態になりました。行政と施設間の交渉段階から、当法人も参加させて頂き、図面で「すくすくルーム」のスペースを確認できて、ようやく安堵。内装とルーム内設計も一

旧「すくすくルーム」内部（サンリア内）

旧「すくすくルーム」入口（平成 26 年 7 月）

任されて、完成までの数ヶ月間は、新規「すくすくルーム」メンバー全員で、先駆的視察見学、事前研修、開設準備等など、切磋琢磨しながらオープンにこぎつけました。

平成二十七年十一月二十日、「ＮＰＯ法人こそだてシップ」は新しい節目を迎えました。ささやかな震災前の「母子相談室」が、まち一番

平成 27 年 11 月「子育て支援センター」オープン式典

の賑わいの場所に、明るく、広く、きれいな「大船渡市子育て支援センター〝すくすくルーム〟」として誕生しました。「大船渡市子育て支援拠点運営業務」の委託です。

「子供達に空を見せて下さい」と施設にごり押し？して建物の東側壁に大きな窓を開けて頂き、今その窓から、子供達が「ポッポだー！」と三陸鉄道の汽車を見つけて、喜んでおります。約三十坪のスペース内には、活動拠点の事務所も併設でき、笑顔の美しいスタッフ達が、まちつくりの一助を担うべく、日夜創意工夫を重ねて利用者の皆様をお迎えしております。

大震災から、山あり、谷あり走り続けた「ＮＰＯ法人こそだてシップ」は、皆様方から賜ったこの場所で、これからも地域の健やかな子育てを応援し、子どもたちを見守って参ります。

ご支援頂いた皆様に
心からの感謝と敬意をこめて。

平成三十年三月

ＮＰＯ法人こそだてシップ代表　伊藤　怜子

新「すくすくルーム」室内